

The House of Mirth における主人公の 仮面の象徴的言動考察 (I)

上 田 みどり*

序

1905年にイーディス・ウォートン (Edith Wharton) (1862-1937) が発表した *The House of Mirth* (『歡樂の館』) において主人公のリリー・バート (Lily Bart) は背負った文化の表象として、時代の美の特質を体現する。それは、歴史や慣習の蓄積を内臓するニューヨーク上流社会の一員でもあり、自由平等の民主的思想に支えられる作家イーディス・ウォートン自身の価値観を試し、彼女の芸術美追求への確証を開示する一場面を提供することにもなった。

南北戦争後の混乱期を過ぎ、アメリカの資本主義経済が無慈悲にも経済的弱者に搾取を繰り返しつつも繁栄を遂げ、アメリカ独自の経済発展を進めようとする中、ウォートンの描く女性主人公は、ピューリタニズムというアメリカ特有の社会規範を裏打ちする精神性に支えられ、墮落した女にもなれず、ニューヨークの富裕階級の伝統的思考を遵奉できず、しかし自ら働くことを知らぬ女性として、優雅な生活に抗しがたく、生きる情熱も失い自らの命を絶ってしまうような、アメリカ資本主義経済構築の陰を体現している。

同時代の社会活動家エマ・ゴールドマン⁽²⁾やマーガレット・サンガー⁽³⁾のように、貧困や差別を実人生の中で戦う女性とはちがう形で、よきオールド・ニューヨーク生まれの「上品な伝統」⁽⁴⁾をも維持する中で作家ウォートンは、富裕階級生まれの主人公リリーの無垢を備える典型的アメリカ女性の没落過程の生き様を、その富裕階級社会の中での戦いとして描いた。それはあたかもゲームにも似た象徴的言動を私たちに露呈する。

この拙論は主人公リリーの心理的葛藤と揺れを、社会に対する仮面のかけ替えを余

* 広島経済大学経済学部教授

儀なくされ、閉ざされた特殊社会にコミットする姿として捕らえた象徴的言動として検証しようとするものである。

イーディス・ウォートンが手本にするヘンリー・ジェームス (Henry James) (1843-1916) の作品、*The American* (1877) では、アメリカ人実業家クリストファー・ニューマンが、フランス人貴族の娘と知り合い、愛し合う仲になるが結婚には至らない。その作品と同じように、ウォートンが描くリリー・バートのケースは、アメリカの富裕階級間の偽善的で閉鎖的な似通ったプロセスが示される。ヨーロッパ文化に類似する、古いニューヨーク上流社会の文化的異質性が、このようなアメリカの十九世紀から二十世紀へ移行する新しい流れと、簡単には融合しえない何かを提示する。前者の作品中、実業家として成功したはずの、一人のアメリカ人貴族として振舞おうとするポーズをとるニューマンが、ヨーロッパの古い貴族社会に受け入れられない階級社会の固い結束がそこで示され、それと同様、*The House of Mirth* の主人公リリー・バートについても容易には享受しない社会が浮かびあがる。このニューヨーク社交界の富裕階級とはどのようなものであったかを考察する。

ニューボートの社交シーズンを終え、主人公リリー・バートは、田舎の別荘に招待されその移動中から物語は始まる。主人公リリーが、結婚適齢期とされる29歳の時期、9月初旬月曜日の午後、グランド・セントラル駅で、セルダンとリリーは偶然出会う。リリーはベロモントのガス・トレナー邸へ行くところである。三時十五分発ラインベック行きの汽車に乗り遅れ、五時半の汽車を待つ間、セルダンのアパートでお茶の時間を過ごすことになる。富裕階級にとってこのお茶の時間は、日常の自然な営みであり、作品中午後のこの時間設定は彼らにとって日常の延長線上にある。セルダンは、“I can give you a cup of tea in no time -and you won't meet any bores.” (HM p. 6) とリリーの今の状況を配慮した上でさりげなく彼女を誘う。

They both laughed, and he knelt by the table to light the lamp under the kettle, while she measured out the tea into a little tea-pot of green glaze. As he watched her hand, polished as a bit of old ivory, with its slender pink nails, and the sapphire bracelet slipping over her wrist, he was struck with the irony of suggesting to her such a life as his cousin Gertrude Farish had chosen. She was so evidently the victim of the civilization which had produced her, that the links of her bracelet seemed like manacles chaining her to her fate. (HM p. 7)

上記のお茶の時間にリリーはセルダンに自分の置かれた状況説明をするが、セルダンは彼女の窮状をそれほど確実には捉えてはいないように思われる。ブレスレットを枷と見立て、それは枷がはめられた古い象牙のような彼女の手と手首を強調し、

リリーは生身の人間ではなく、むしろ彫像の人物のような輪郭を我々に与える。セルダンの従姉妹ゲーティ・ファリッシュの話が出て、彼女との比較において、リリーは伯母に自由を束縛されながらも、一緒に暮らさざるを得ない立場を話す。セルダンは「結婚はあなたの天職ではないのか」とためらわず質問し、リリーはその質問に応ずるように若さと美を持続する必然性を捉える。それは自力では生み出すことのできないほどの高額な維持管理費の生産力を余儀なくする。「自分は金のかかる人間だ」と答えることになる。

セルダンと別れてアパートを出たところ、ユダヤ人のローズデールに会う。セルダンのアパートに寄ったことは、彼女にとって自然の成り行きであったにも関わらず、そのことで悪評のローズデールに、とりつくろった嘘をつき、その上彼の申し出を断るといふ失敗をおかしてしまう。彼女の意識の中で、すでにローズデールという人間のイメージができあがっている。彼は、ウォール街が不景気なこの時期に資産を二倍にしたが、社交界に受け入れられない、彼女にとって「何人ものつまらないユダヤ人と同じである」。彼も彼女にとって成り上がり者でしかない。

リリーはそうした成り上がり者を軽蔑しているにもかかわらず、そのような男性たちの助けを求めざるをえない状況に追い込まれる。日常において有閑階級の生活様式を止めることができない彼女は、実際ベロモントに着いてからも、ブリッジに興じ、それに負け、多額の借金を続けることになる。

Affluence, unless stimulated by a keen imagination, forms but the vaguest notion of the practical strain of poverty. Judy knew it must be "horrid" for poor Lily to have to stop to consider whether she could afford real lace on her petticoats, and not to have a motor-car and a steam-yacht at her orders; but the daily friction of unpaid bills, the daily nibble of small temptations of expenditure, were trials as far out of her experience as the domestic problems of the charwoman. (HM p. 77)

実際貴族的階級に属するのであれば、この支払いに窮することはなかったが、リリーは戦いのごとく、これらの試練に立ち向かわなければならなかったし、それを指摘する友人にも腹立たしく思うものでもある。若さと美を保持するために、リリーは経済の動きに無知のまま、不当な投機に走ることになる。

Trenor and Miss Bart prolonged their drive till long after sunset; and before it was over he had tried, with some show of success, to prove to her that, if she would only trust him, he could make a handsome sum of money for her without endangering the small amount she possessed. She was too genuinely ignorant of

the manipulations of the stock-market to understand his technical explanations, or even perhaps to perceive that certain points in them were slurred; the haziness enveloping the transaction served as a veil for her embarrassment, and through the general blur her hopes dilated like lamps in a fog. She understood only that her modest investments were to be mysteriously multiplied without risk to herself. . . (HM p. 85)

このリリーとガス・トレナーとの関係にはリリーの仮面の誤算が目立つ。リリーは商取引が理解出来ないわけで、霧がかった彼女の心の状態が、トレナーとの契約による気まずさをあからさまにしないでおく緩衝剤になるし、トレナーを自分からある程度の距離を置くことにより、彼の欲求を管理できると想定する。男たちの扱い方によって彼女の虚栄心は慰められるが、男たちの虚栄心が、彼女へ義務を負わせることにもなる。それは彼女が為替制度もリスクも知らない、仮面ゲームの敗者となることを予告するものでもある。

リリーのガス・トレナーやジョージ・ドーセットとの関係については、この閉鎖的富裕階級の間での恰好の話題提供になり、悪意に満ちた根拠のないうわさを提供することになる。

“Conspicuous!” gasped Mrs. Peniston. She bent forward, lowering her voice to mitigate the horror. “What sort of things do they say? That he means to get a divorce and marry her?”

Grace Stepney laughed outright. “Dear me, No! He would hardly to that. It—it’s a flirtation-nothing more.”

“A flirtation? Between my niece and a married man? Do you mean to tell me that, with Lily’s looks and advantages, she could find no better use for her time than to waste it on a fat stupid man almost old enough to be her father?” (HM p. 124)

上記はグレース・ステプニーと伯母のミス・ペニストンの会話である。グレース・ステプニーはミス・ペニストンに、リリーについての周りのうわさを忠告したのであるが、伯母は最初の段階で、問題にしない。伯母は姪のリリーを信じきっており、むしろミス・ペニストンの評価基準からみて、リリーの美しさがガス・トレナーと不釣り合いであることを指摘する。しかしなおもグレース・ステプニーはそのうわさの信憑性を高める情報を多量に持ち出し、それを聞いてミス・ペニストンの驚きは高まる。その言葉の中、「人目を引く」という言葉が使われる。この「人目を引く」ことから、「見せかけの」という言葉は、ヴェブレンが著書

『有閑階級の論理』の中で、⁽⁵⁾ 皮肉にも有閑階級の特徴を著し、その階級の皮相性を敷衍している。この拙論の始めに記した、ヘンリー・ジェームスの作品『アメリカ人』の中で、成り上がり者として扱われるアメリカ人ビジネスマンがフランス人貴族の女性との結婚に失敗する過程で、貴族の男性を愛人として上昇していく上流階級の女性を描くが、*The House of Mirth* では組み合わせが逆で、作られたイメージの貴族然としたレディであるリリーは、ガス・トレナーを使って生きる手段として少しばかりの金が入るようになっただけなのである。リリーは表面上レディのイメージを作り上げることが、彼女自身の商品価値を高めるため、今必要なことだと誤算する。この「人目を引く」行動や、リリーの身につけるものの消費は、「みせかけの」消費として挙げられ、贅沢品や生活の快適さを与えるものは有閑階級に属しているものの特権であるが、この先リリー個人の努力でその階級に受け入れられ、有閑階級に所属し続ける確証はない。未だに不特定で不確かな人物からの一時凌ぎの援助により、仮面を装っているだけのことなのである。仮面の裏の真実は次のような事実が待っている恐怖をリリーは確信している。

It is true that she knew the to strata better than she knew anything else; but both in *The House of Mirth* and *The Fruit of the Tree*, she is always aware of the pit of misery which is implied by the wastefulness of the plutocracy, and the horror or the fear of this pit is one of the forces that determine the action. There is a Puritan in Edith wharton, and this puritan is always insisting that we must face the unpleasant and the ugly.⁽⁶⁾

リリーの現実の行動様式と彼女の精神性は必ずしも合致しない。リリーの現実生活は階級からの脱落という恐怖がいつも付きまとい、文明が生み出す犠牲者としてのリリーの姿が暗示され、そこに作家ウォートンのピューリタンの視座がちらつく。

リリーの消費がどんなことで使われ、何のために借金を返さなければならないかという事実関係を、やがて伯母は知ることになる。「ちゃんとした身なり」という説明に伯母は納得するが、ギャンブルの借金については知る由もない。そしてついに伯母は軽蔑と怒りで、情報提供者の客ミス・ステブニーを返してしまうのである。

次のリリーの見せ場は、ウエリー・ブライ夫妻が主催する活人画と高価な音楽の二つを備えた大パーティである。計画準備には著名な肖像画家があたることになる。招かれた十数人の上流階級の女性が一続きの絵に出演する。リリーがレイノルズ(1723-1792)の「ミセス・ロイド」を演じた時、クライマックスの場を迎える。出席者全員の称賛の声は、肖像画に彼女がそっくりだということではなく、リリー

自身が自然の中に溶け込んだ美しさに対してなのである。彼女の自然の美と気品は賛美の対象となる。実際、リリーの外見は作品中最初から特定してはいない。髪の色も目の色も特定されてはいないのである。それは発展する資本主義社会の上流階級の女性の具現化したものである。それはつまりこの時代と社会が生み出した産物とも言える。

この時点で、真面目に彼女の価値を受け止めるセルダン、まわりの男性たちの侮辱的な客観論から、これからのリリーの人生の悲劇への傾斜を察知している。そして彼女と一緒にいたい願望を持つのである。事実彼女の悲劇の幕は後半に向かって極限に向かうことになる。

社会階級からの脱落と死に至る過程まで、リリー・バートが社会に向ける仮面に頼りながらも、内面のゆるぎない自分自身の高潔さを保持しようとする悲劇の最終部分は次回の拙論に続けて発表したいと思う。

注

テキストは、Edith Wharton, *The House of Mirth*, (New York, London: W.W. Norton & Company, 1990) を使用した。本文引用はすべてこの版からであり、ページ数は引用に続けて、括弧内に入れて示す。

- (1) 「1861-5商工業を中心とした北部と、大農園と奴隷制度に依存していた南部との対立は、1850年頃から自由州、奴隷集の対立としてしだいに激化し1860年リンカーンが大統領となるや、議会における敗北を必至と見て、南部は連邦を脱退して、連合を結成した。結論は北部の勝利であるが、この内乱は、アメリカが北部の産業主義の支配化に置かれたことを意味し、この戦いを境にアメリカは急速に資本主義国家として発達する。」ウォートンもこの内乱時に生まれ、この激変する経済社会の中で育った。括弧内亀井俊介『英米文学辞典』（研究社、1985）、p. 238
- (2) Goldman, Emma (1869-1940) ユダヤ人の子としてロシア領リトアニアに生まれ、無政府主義者。85年にアメリカに渡る。1892年アメリカ労働史上で最も激烈な争議の一つとして知られるホームステッド・ストライキが起こり、カーネギー鉄鋼会社のペンシルヴァニア州ホームステッド工場における争いで、ついに州兵が出動して労働者側をおさえつけた。この騒ぎの最中、愛人の資金調達のため売春を決意、看護婦の資格も得る。実際に売春をしたかどうかは定かではないが、多くの売春婦と仲良くなり、かかわりを持ち、売春の原因として、まず第一に経済搾取を取り上げる。彼女によれば、売春は資本主義とピューリタニズムという「アメリカ的状况」の産物であると考えた。『ピューリタンの末裔たち』——アメリカ文化と性（研究社、1990）、pp. 125-126
- (3) Sanger, Margaret (1879-1966) ニューヨーク州西部のコニングに生まれる。11人の子供の六番目で、母はカトリック。家業は石工。1900年見習い看護婦になる。二年後結婚。ブルジョワの生活に夫婦ともあき足らず、マンハッタンのアパートに住んで、あらゆる分野でラディカルな人たちとつきあう。経済的自立を求めて、ロウアーイーストサイドの貧民街で派出看護婦をする。バース・コントロールという言葉始めて使った。1920年『女性と新しい種族』という本を出版。産児制限こそ「文明の要」だという。Ibid. pp.

132-141

- (4) genteel tradition. George Santayana に始まる用語で、通常、既成道徳や respectability を重んじて現実を直視しようとしなない New England の保守精神をさす。
- (5) Thorstein Veblen, *The Theory of The Leisure Class* (Viking Press, 1967)
- (6) Wilson, Edmund, *The Wound and the Bow*, (Houghton Mifflin Company, 1941), p. 203